

慢性的な産科医不足解消へ、教育段階から「処方」。山梨大医学部産婦人科学教室は、医学生に産科への興味を持ってもらおうと、妊婦と赤ちゃんに対する救急処置を教える課外講座を開いている。現場を知る医師の熱心な指導で産科医療の使命や魅力をアピール。医学生に産科を将来の選択肢の一つとしてもらう考えだ。〈桑原久美子〉

山梨大医学部 担い手育成めざす



妊婦や赤ちゃんの模型を使って吸引分娩の方法を学ぶ学生ら
中央・山梨大医学部

「興味湧く」医学生に好評

5月中旬の午後7時。山梨大玉穂キャンパスの教室に学生約40人が集まつた。この日は月1回の産婦人科学教室講外講座。1時間の講義の後、9班に分かれ、妊婦や赤ちゃんの模型を使って、吸引器で赤ちゃんを取り出す吸引分娩の方法を学んだ。

「そうそう、手つきがいい手では、学生が模型の赤ちゃんを取り上げた瞬間、歓声と拍手が上がつた。同大医学部5年の上田一輝さん(23)

現場

産科医不足講座で「処方」

山梨日日新聞

6月16日
日曜日

発行所 山梨日日新聞社
〒400-8515 甲府市北口2-6-10
電話(055)231-3000
編集 231-3111 FAX 231-3161
事業 231-3133 出版 231-3105
広告 231-3131 販売 231-3132
©山梨日日新聞社2013年

は、「救急医の勉強に役立ちちょうど軽い気持ちで受講したが、やつてみると産科にも興味が湧く。将来の選択が広がった」と話す。

受講は無料

同大によると、産科医は時間外勤務が多い上、不測の事態が起きやすいなど負担が大きく、訴訟が多いといった

1月から月1回で計14回実施。学習のまとめとして、翌年3月に周産期救急の知識や技能の国際的認証を受けられる教育コース「ALSO」を受講する。学生の費用負担はなく、通常は受講料が約3万円かかるコースを無料で受けられる。とあって人気を呼び、11年度は22人、12年度は31人が修了。本年度は約50人が受

講している。
運営は、県が周産期医療を支援するため山梨大に設置した寄付講座などを活用。同大が産科教育に力を入れる背景には、県内の深刻な産科医不足がある。県医務課によると、県内でお産ができる病院と、療養所は15カ所。岐阜、愛知、県東部地域は出産する医療機関がない状態が続いている。

意識が変化

産婦人科学教室の平田修司教授は、「開業医の高齢化で今後ますます産科医不足が懸念される。安全な周産期医療を維持するためにも産科医育成

たイメージがあり、志願する学生の数は低迷している。

これまでの受講生の中から産科医志望者も出てきた。この春コースを修了した小野静香さん(24)は、「産科は大変そうだと思うが、命が誕生する場に立ち会える榮

光になった」と意識の変化を口にする。今田愛乃さん(23)は、「命がかけの現場に対応する能力が求められることにやりがいを感じる」と話す。

平田教授は、「受講生の中から将来の産科医が育てばうれしい。県内の産科医療の水準を高め、安全で利便性の高い出産環境を目指したい」と話している。